

2023 年度 大谷大学文藝コンテスト

【親鸞部門】総評

審査委員長 井上 尚実

今年度も文藝コンテスト親鸞部門には、たくさんの中学生・高校生から応募がありました。ありがとうございます。字数の限られた比較的短い文章の作文ですが、テーマに沿って実際に何を書こうかと考え、自分の言葉で表現するのは容易なことではないと思います。それにもかかわらず高校生の部に 2,745 作品、中学生の部に 367 作品もの応募があったことは非常に喜ばしいことです。すべての応募者のみなさんのクリエイティブな文章力に敬意を表します。締め切り後、大谷大学仏教教育センターに所属する教員を中心に、全作品をしっかりと読ませていただき、厳正に審査いたしました。

今年度のテーマは「あなたにとっての宝もの」でしたが、自分が大切にしている経験や人物や言葉など、さまざまな「宝もの」が興味深く語られていました。全体的な傾向として、自分の家族について書いた作品が多かったように思います。身近な家族との日常の大切さ、かけがえのなさという感覚が、コロナ禍の3年間を経て強まったのだというように感じます。周囲の身近なところに「わたしにとっての宝もの」といえるような大切な家族の存在があることに、多くの若者が気づいています。

人間としてこの世に生まれてきた私たちは、宝の山の中を歩いているようなもので、たくさんの「宝もの」と出会う機会がみんなに開かれていると思います。おそらく大事なことは、「宝もの」に出会ったときにそのかけがえのない価値に気づき、自分の人生の豊かさに目を向けて積極的に生きていくことでしょう。「ボーッと生きてる」とせっかく「宝もの」に出会っていても気づかずに通り過ぎてしまいがちです。

2020 年春に新型コロナウイルスの感染拡大が世界的に問題となって以降、自然災害や戦争など暗いニュースが続いてなかなか元気が出ない状況がありますが、今回の応募作の中に表現された様々な「宝もの」には、読む者の心をパッと明るくしてくれるような輝きがあり、特に入賞した作品には心を動かされました。

親鸞聖人が生きられた 800 年前の日本も、戦争や災害が頻発して生きるのが大変な時代でした。そんな中で、親鸞聖人はどんな「宝もの」に出会い、何を大切なよりどころとして生きられたのでしょうか。現在、戦禍に苦しんでいるウクライナ東部やパレスチナのガザ地区の多くの難民にとって、「宝もの」とは何なのでしょう。「あなたにとっての宝もの」を考えると、その「あなた」を少し広げてみる想像力も大切なように思います。今回【親鸞部門】に応募されたみなさんが、今後もエッセイを書くことを習慣にして、また機会があれば是非とも文藝コンテストに応募してほしいと思います。